



古典 (古文)

光村図書出版株式会社

古典(古文)

昭和女子大学名誉教授
作家

〔別記著作者〕

桜美林大学教授
茨城大学助教授
兵庫教育大学教授
東京都立北園高等学校教授
大阪府立大学教授
成蹊高等学校教諭
国立国語研究所言語計量研究部長
図書館情報大学教授
詩人
東京都立西高等学校教諭
前成蹊大学教授
大阪大学教授
京都大学教授

石森延男
井上靖

石川忠久
市毛勝雄
植垣節也
江藤啓一
樺島忠夫
北川茂治
斎賀秀夫
酒井憲二
中桐雅夫
原誠
飛田多喜雄
宮地裕
渡辺実

昭和五十八年二月一日 印刷
昭和五十八年二月五日 発行
〔昭和五十七年三月三十一日 文部省検定済〕

定価
文部大臣が認可し官報で告示した定価
（右記の定価は、各教科書取次供給所に
表示します。）

著作者 石森延男

井上靖

ほか十三名(別記)

発行者 東京都品川区上大崎二―一九―九
光村図書出版株式会社

代表者 平岩正雄

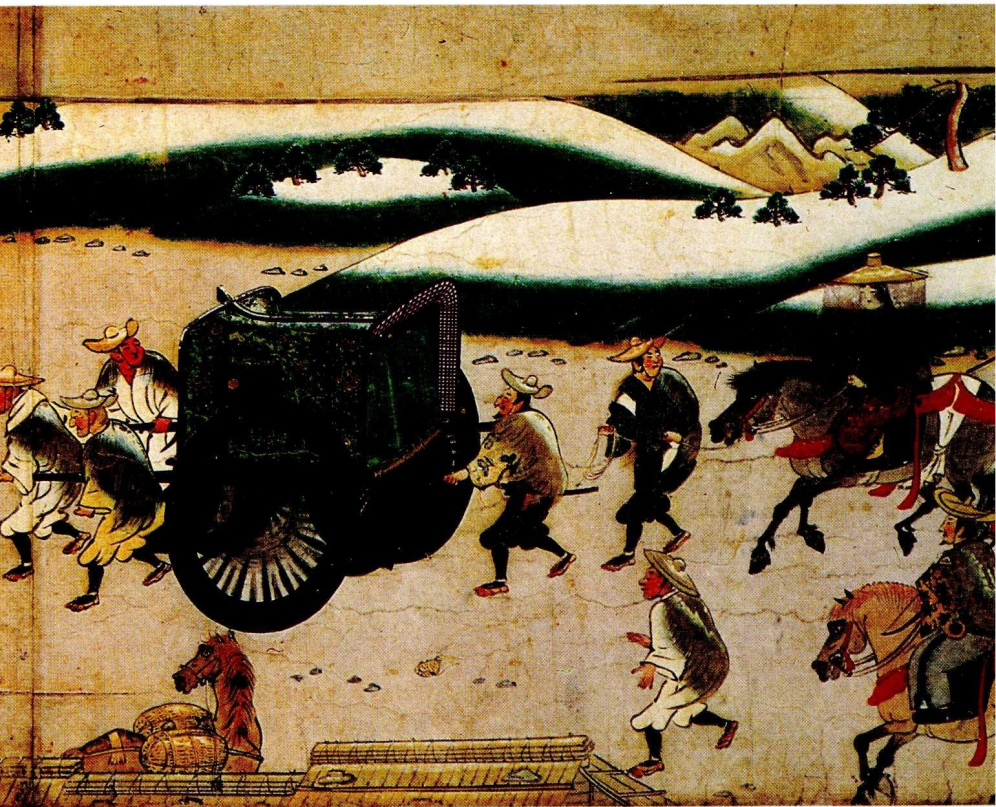
印刷者 東京都千代田区三崎町二―一五―六
株式会社 加藤文明社

代表者 加藤保幸

発行所 東京都品川区上大崎二―一九―九
光村図書出版株式会社

電話 東京(493) 二―二―二(代表)

表紙／友禅意匠文様(竹内庄造)



すが わらのたか すえのむすめ さん けい
菅原孝標女の石山寺参詣

『石山寺縁起絵巻』第三卷第三段

平安時代には観音信仰が盛んで、^{きょう}都に近い石山寺（本尊は如意輪^{じよいりん}観音）には、王朝貴族やその子女の参詣する者が多かった。『更級^{さらしな}日記』には、寛徳2年（1045年）11月に石山寺に参詣したことが述べられている。

『石山寺縁起絵巻』は、石山寺草創の縁起と本尊の靈験や人々の信仰のありさまを描いたもので、14世紀前半の成立と考えられている。本図は、『更級日記』の筆者の参詣の様子を描いたもので、^{おう}逢坂^{さか}の関にさしかかったところである。筆者は、画面やや左寄りに描かれた八葉車^{はちよう}の中に乗っていると思われる。

昭和五十七年三月三十一日 文部省検定済 高等学校国語科用

古典 (古文)

光村図書出版株式会社

玉 勝 間

目 次

□ 学問への一貫した情熱	六
書読むことのたとへ	八
新たに言ひ出でたる説は	九
とみに人のうけひかぬこと	三
師の説になづまざる事	三
兼好法師が詞の論ひ	五
うはべをつくる世のならひ	六
<hr/>		
田舎にいにしへの	六
みやび言の残れること	三〇
一言一行によりて、	三〇
人のよきあしきを定むること	三
いにしへよりも、	三
後の世のまされること	三

徒然草

□ 味わい深い達人の言 ……………

六

つれづれなるままに ……………

三〇

いでや、この世に生まれては ……………

三〇

あだし野の露消ゆる時なく ……………

三〇

をりふしの移りかはること ……………

三〇

飛鳥川の淵瀬 ……………

三〇

雪のおもしろう降りたりし朝 ……………

三〇

九月二十日のころ ……………

三〇

あやしの竹の編み戸のうちより ……………

三〇

公世の二位のせうとに ……………

三〇

延政門院いときなく

おはしましける時 ……………

友とするにわろき者 ……………

あらためて益なきことは ……………

花は盛りに ……………

一事を必ず成さんと思はば ……………

後鳥羽院の御時 ……………

八つになりし年 ……………

〔文末の特殊な終止法〕……………

三

三

枕草子

□ 才知に富んだ連想の文学

三月三日は …………… 六

木の花は …………… 六

河は …………… 六

たとしへなきもの …………… 六

ありがたきもの …………… 六

頭中将の、すずろなるそら言を …………… 六

御かたがた、君たち …………… 六

宮に初めて参りたるころ …………… 六

九月つごもり …………… 六

野分のまたの日こそ …………… 六

ただ過ぎに過ぐるもの …………… 六

文ことばなめき人こそ …………… 六

この草子、目に見え心に思ふことを …………… 六

〔敬語の動詞・助動詞〕

…………… 九

土佐日記

□ 新しい文学様式の誕生

…………… 六

船出	……………	突	——	婦	……………	一〇
海路の旅	……………	穴	——	京	……………	一〇

更級日記

□ はるかなるあこがれの心	……………	……	……	……	……	一〇
---------------	-------	----	----	----	----	----

門出	……………	二〇	——	物語求めて	……………	二三
松里のわたり	……………	二二	——	姉なる人	……………	二五

付録

1 主な助動詞・助詞の意味・用法	……………	……	……	……	……	二九
2 用言・助動詞活用表	……………	……	……	……	……	三六
3 参考図録	……………	……	……	……	……	三三

* 単元扉の文字は『てんぷちようほん粘葉本 和漢朗詠集』(伝藤原行成筆)から集字―原寸

玉 勝 間



学問への一貫した情熱

『玉勝間』は、寛政五年（一七九三）本居宣長六十四歳の時に起筆された。以後、三冊ずつ五次にわたって刊行され、最終の板本は宣長の死後に世に出た。すなわち、本書は宣長の晩年に到達した思想を知ることができる著作である。

宣長という人は、近世国学の大成者で、殊に大著『古事記伝』で有名である。三十五歳から六十九歳までの、人生の大半を『古事記』の注釈に費やした彼の情熱については、今さら言うまでもないが、

そのほかにも『源氏物語』『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』などの研究に努め、それぞれ立派な業績を残している。『玉勝間』は、そういう宣長の研究生活から生まれた随筆である。

随筆といっても、『枕草子』や『徒然草』でいう意味の随筆とは、趣を異にする。学問のひまひまにいろいろと考えたことを、整然たる学問的体系や全巻注釈の形式をとらないで、自由に話題を選んで断片的に述べる形をとったというだけで、内容はほとんど学問に関することであり、学者としての宣長の良心に恥じないものである。だから、『玉勝間』には、古典の字句の考証もあれば、ある言葉の初出例を書き留めたメモ的な文章もあり、学問をする者の心得もあり、時には儒仏への激しい攻撃もあって、論点は多岐にわたるけれども、一貫しているものは宣長の学問に対する愛情である。

宣長は無類の努力家で意志の強い人であったから、一見、堅苦しい学者のようにみえるけれども、実は柔軟な魂と深い人間理解をもった人でもあった。文学は政治や道徳とは別に独立した価値をもつものだという主張や、悲しむべき時に涙を抑えるのは「本情」ではない、すべて偽り飾らないのがよいという説や、この世は善と悪、幸と不幸が併存するもので、完全な善の生活をもつことはできないという論などは、彼が終生もち続けた考え方から出たものであった。儒仏を排撃する文章を多く書いたのは、当時の政治・道徳の世界に大きく儒仏の教えが浸透していたからであり、その教えは、人間だれもがもっているはずの「もののあはれを知る心」を抑制するものだと彼がみていたからであった。なお、彼の尊敬する師賀茂真淵に「ををしさ」を価値とする論があって、師弟相反する主張が公になされていたことになる。これも宣長の自由な考え方を理解するうえで参考になることであろう。

書読むことのたとへ

①^す須賀直見^{がのほみ}が言ひしは、「広く大きな書^{よみ}を読むは、長き旅路を行くがごとし。おもしろからぬ所も多かるを経^へ行きては、また、おもしろく目さむる心地する浦山にも至るなり。また、脚強き人は速く、弱きは行くこと遅きも、よく似たり。」とぞ言ひける。をかしたとへなりかし。

(二一の巻)

5

① (七三三—七三七) 江戸時代中期の歌人。伊勢の国松坂(今の三重県松阪市)の生まれ。本居宣長の門に入って歌道を学んだ。家集に『蓬壺堂歌集』がある。

〔研究〕

- 一 このたとえを自分の読書経験に照らして、思い当たるところがあるか、話し合ってみよう。
- 二 弟子の言葉を「をかしたとへなりかし。」として書き留めた筆者の人の柄について、話し合ってみよう。
- 三 古典語では、次の傍線部のような用言または助動詞の連体形が、一つの体言のような働きをする。現代語ならば、次の(1)～(3)の△の箇所に、どんな名詞または助詞が入るだろうか。
 - (1) 須賀直見^が言^ひし[△]は、
 - (2) 広く大きな書^を読^む△は、
 - (3) 弱^き△は行くこと遅^き△も、

四 次の傍線部の語は、すべて用言の連体形である。これらの用法の異同を、「活用形の用法」(三六―七)を参考にして調べてみよう。また、文中の他の用言・助動詞の連体形についても、その用法を調べてみよう。

○ 広く大きな書を読むは、長き旅路を行くがごとし。

新たに言ひ出でたる説はとみに人のうけひかぬこと

おほかた世のつねに異なる新しき説②をおこす時には、よきあしきを言はず、まづひとわたりは、世の中の学者に憎まれそしらるるものなり。あるは、おのもともより来つる説といたく異なるを聞きては、よきあしきを味③はひ考ふるまでもなく、初めよりひたぶるに捨てて、とりあげざる者もあり。あるは、心のうちにはげにと思ふふしも多④くあるものから、さすがに近⑤き人の言ことに従はむことのないたて、よしともあしとも言はで、ただうけぬ顔して過ぐすたぐひもあり。あるは、ねたむ心のすすめるは、心にはよしと思ひながら、その中のきずをあなが

② ここでは「学説」の意。

③ 確かめ、考証する。

④ たくさんあるけれども。

⑤ (自分と) 同時代の学者。

⑥ (いちだんと) 進んでいる(者)は。

ちに求め出でて、すべてを言ひけたむとかまふる者もあり。

おほかた古き説をば、十が中に七つ八つはあしきをも、あしき所をばおほひ隠して、わづかに二つ三つのとるべき所のあるをとりたてて、力のかぎりたすけ用ゐむとし、新しきは、十に八つ九つよくても、一つ二つのわるきことを言ひたてて、八つ九つのよきことをもおしけちて、力のかぎりは、我も用ゐず、人にも用

5

ゐさせじとする、こはおほかたの学者のならひなり。しかれどもまた、まれまれには、新たな説のよきを聞きては、古きがあしきことをさとりて、すみやかに改め従ふたぐひも、なきにはあらず。古きをいかにぞや思ひて、かくはあらじかとまでは思ひよれども、自ら定むる力なくて、疑はしながらさてあるなどは、新たなるよき説を聞きては、かくてこそはと、いみじく喜びつつ、たちまちに従ふたぐひもありかし。

10

おほかた新たな説は、いかによくても、すみやかに用ゐる人まれなるものなれど、よきは、年を経ても、おのづからつひには世の人の従ふものにて、あまねく用ゐらるれば、その時に至りては、初めにねたみそしりしともがらも、心には悔しく思へど、おくれればせに従はむも、なほねたく、人わろくおぼえて、快

15

① どうかのかなと（疑問に思つて）。

② そのままにしている。

③ こうあってこそ（正しいのだ）。

④ 外聞が悪く。

からずながら、古きを守りてやむともがらも多かり。しか世の中の論あげつらひ定まりて、皆人の従ふ世みなよとになりては、初めよりすみやかに改め従ひつる人は、賢く心さしく思はれ、古きにかかづらひて、とかくとどこほれる人は、心おそく言ふかひなく思はるるわざぞかし。

(二の巻)

〔研究〕

一 新説に対する学者の態度を、箇条書にして整理してみよう。

二 この文章に述べられていることを通して感じられる、筆者の学問に対する態度について話し合ってみよう。

三 次の傍線部の語は、すべて連用形である。これらの用法の異同を、「活用形の用法」(二六ページ)を参考にして調べてみよう。

(1) 初めよりひたぶるに捨てて、とりあげざる者もあり。あるは、心のうちにはげにと思ふふしも多くあるものから、さすがに近き人の言に従はむことのねたくて、(元・5)

(2) 初めよりすみやかに改め従ひつる人は、賢く心さしく思はれ、古きにかかづらひて、とかくとどこほれる人は、心おそく言ふかひなく思はるるわざぞかし。(二・2)

四 次の a・b 二つの言い方は、それぞれどう違うか。傍線部の助動詞の意味に注意して比較してみよう。
〔「主な助動詞の意味・用法」(二九六ページ)参照〕

- | | | | |
|-----|------------------|------------------------|--------------------|
| | (1) | | (2) |
| | a | a | a |
| | b | b | b |
| | 近き人の言に従ふことのねたくて、 | 近き人の言に従はむことのねたくて、(九・6) | ねたむ心のすすむは、 |
| | | | ねたむ心のすすめるは、(九・8) |
| (3) | a | | |
| | b | (4) | a |
| | かくはあらず | a | とかくとどどこほる人は、 |
| | かくはあらず(二〇・8) | b | とかくとどどこほれる人は、(二・3) |

師の説になづまざること

おのれいじしへふみ古典こてんを説とくに、師との説ととたがへること多く、師の説のわろきことあるをば、わきまへ言ふことも多かるを、いとあるまじきことと思ふ人多かめれど、これすなはちわが師の心にて、つねに教へられしは、「後によき考への出できたらむには、必ずしも師の説にたがふとて、なはばかりそ。」となむ教へられし。こはいと尊き教へにて、わが師の世にすぐれたまへる一つなり。

① 解釈し、研究する。
 ② 賀茂真淵(一六七一—一七六〇)。国学者・歌人。遠江の国浜松(今の静岡県浜松市)の生まれ。『万葉集』をはじめとする多くの古典の解釈・研究を行い、優れた門弟を育成して、

おほかたいにしへを考ふること、さらに一人二人の力もてことごとく明らかめなくすべくもあらず。また、よき人の説ならむからに、多くの中には、誤りもなかなからむ。必ずわるきこともまじらではえあらず。そのおのが心には、「今はいにしへの意こころことごとく明らかかなり。これをおきてはあるべくもあらず。」と思ひ定めたることも、思ひのほかに、また人の異なるよき考へも出でくるわざなり。あまたの手を経るまにまに、先々の考へのうへを、なほよく考へきはむるからに、次々に詳しくなりもてゆくわざなれば、師の説なりとて、必ずなづみ守るべきにもあらず。よきあしきを言はず、ひたぶるに古きを守るは、学問の道には言ふかひなきわざなり。

また、おのが師などのわろ 10

きことを言ひ表すは、いともかしこくはあれど、それも言はざれば、世の学者その説にまどひて、長くよきを知る期なし。師の説なりとして、わ 15



本居宣長像 (伝自筆)

③ 論証する。
④ 下の「なはばかりそ」と呼応して、「決して……遠慮するな」の意。
⑤ 優れた学者の説であるからと

⑥ 古代の精神。
⑦ いっそう詳しく研究を進めていくので。前出の「よき人の説ならむからに」との違いに注意。

⑧ (その説に) こだわり、守っていく必要はない。
⑨ おそれおおいことではあるけれど。